出て來ない。乞食が二、三人焚火してゐるのを、夜だつたから匪賊かと思つたことはあるさうだが。

だから滿洲に行く考へ方を換へさへすれば、即ち滿洲を認識し直しさへすれば、開拓民は充分に出來る。ただ此所に注意せねばならぬのは、我利々々の自己本位では移民は出來ないことである。種蒔から收穫まで共同してやらねばならぬ。從つて、その心構へを換へ、協同的團體訓練をして行けば我々米穀業者は立派に百姓としてやつて行ける。滿洲は我々が行くに相應しい素晴しく良いところである。

財團法人愛育會の愛育施設利用狀況調査

財團法人愛育會に於ては今後の愛育事業方策樹立の基礎資料を求むることを目的として農山漁村に於ける母性の季節別戸外勞働時間狀況及び現存愛育施設利用狀態の全國的調査を決定、昭和十五年七月その豫備調査を施行したが、豫備調査の施行地域及び調査事項を掲ぐれば次の如くである。

豫備調査施行地域

埼玉縣(七月八日より十一日まで)
　野本村(農)、堀兼村(農)、金子村(農)、日勝村(農)
千葉縣(七月八日より十日まで)
　小櫃村(農)、七浦村(漁)、西畑村(山)
神奈川縣(七月二十日及廿五、六日)
　成瀨村(農)、青野原村(山)、福浦村(漁)

同調査項目

調査項目は次の通りである

(一)　部落の狀況(戸數、世帶數、現住人口、主産業)
(二)　母親及兒童數(三歲以上學齡前幼兒數、三歲以下乳兒數、學齡前乳幼兒を擁する母親數、最近一年間出生數)
(三)　母親の戸外勞働時間狀況(各月別時間數、勞働の主なる種類)
(四)　現存愛育諸施設利用狀況(保育所、共同炊事、助産組合、醫師及産婆、保健婦若くは之に類する者)
(五)　將來利用し得べき施設(學校、寺院、神社、公會堂、其他)

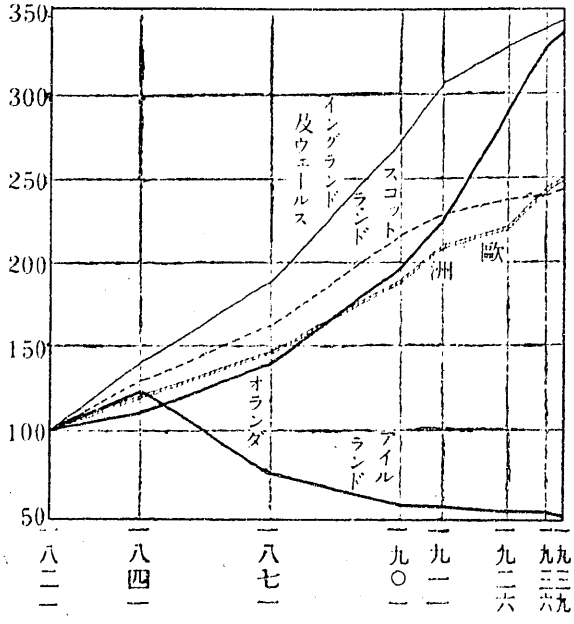
尙、右の豫備調査の結果に基き第一次調査として福島、石川、岐阜、千葉、埼玉、神奈川の六縣下全村の調査が行はれる筈である。

最近各國の人口情勢

人口漸減を續けるアイルランド

(アイレ共和國)

獨立後第二回目の人口調査(一九三六年)の其の後の詳報によると總人口約二、九六八、四〇〇人、內男一、五二〇、四〇〇人、女一、四四八、〇〇〇人で、男千人に付き女は僅かに九五二人の割合に過ぎない。アイルランドはルクセンブルグ、ブルガリア及歐洲トルコと共に歐洲に於ける稀しい男子過剩國の一つであるわけだ。尤も主都ダブリンだけは例外で女子過剩を示してゐる。



アイルランド人口現象の最も著しい特徴は英國治下の最近百年間、歐洲諸國が一樣に人口著增をみたこの期間に一貫して人口減退を示してゐることで圖示すれば別揭の如く數字を擧ぐれば次の如くである。

	アイルランド	イングランド及ウェールス	スコットランド
一八二一年	五、四二一千	二、〇〇〇千	二、〇九二千
一八四一年	六、五二九	一五、九一四	二、六二〇
一八七一年	四、〇五三	二、七二三	三、三六〇
一九〇一年	三、三二	三、五二八	四、四七二
一九一一年	三、四〇	三六、〇七〇	四、七六一
一九二六年	二、九七二	三九、〇六七	四、八六四
一九三六年	二、九六八	四〇、八三九	四、九六六

主として農業人口に關係するこの人口減退の原因は大土地所有の跋扈で且つアイルランド人自身が土地所有者となれない點にある。沼湖面積を除く全面積七〇、二八三方粁の平均人口密度は地味、氣候、交通等の好條件にも拘らず一方粁當り僅かに四三人、主都を除けば三六人に過ぎない。人口千五百以下の町村人口は一八四一年には全人口の六分の五（八三・三%）であつたが一九三六年には三分の二（六四・四%）で總數に於ても三百五十萬の著減をみてゐる。が都市人口も前世紀後半には漸減してをり增勢をみせたのは今世紀に入つてからのことである。

主都ダブリン市の人口は約四六八、〇〇〇人、近郊を含めて五〇七、九〇〇人、全人口の一七・一%を占めてゐる。

年齡構成は次の如くで生產年齡（一五—六五歲）人口の過少が目立つが之は海外移出の結果で、一五歲以下の少青年の人口は尠くはなく、六五歲以上人口も著しく高く老人層の人口比率に於てはフランス（九・八%）、ベルギー及ラトビア（各九・九%）に亞いでゐる。

	一九三六年		一九一一年
	千人		
一五歲以下	八二〇	二七・六%	二九・三%
一五—三〇歲	七四〇	二四・九〃	二五・八〃
三〇—四五歲	五三八	一八・二〃	一九・〇〃
四五—六五歲	五八三	一九・六〃	一五・四〃
六五歲以上	二八七	九・七〃	一〇・五〃

特に注目すべきは二五乃至三〇歲男子人口の中八二%が猶ほ獨身でゐることで、民族的並に經濟的窮狀を物語つて遺憾ない。

尙、一九三六年以後も人口は更に減退を續けてをり、一九三九年中頃の總人口二、九三四、〇〇〇人。またダブリン市の人口は四八二、三〇〇人、總人口の約六分の一を占めてゐることになる。

（Wirtschaft. u. Statistik 1940 Nr. 2 所載）

比律賓で二十年ぶりの人口調査

米領フイリツピンに於ては一九三九年一月一日廿年ぶりの人口調査が行はれたが總人口約一五、九八四、二〇〇人、過去廿年間に一倍半以上になつたことになる。都市人口の增加は特に著しい。

主都マニラ市の人口は約六二三、四〇〇人（一九一八年には約二八五、三〇〇人）、增加の最も著しいのはバオ市で九五、四〇〇人（一九一八年は一四、九〇〇人）五四二・一%の增加である。

（Wirtsch. u. St. 1940 Nr. 5/6 所載）

ユダヤ人の增加著しいパレスチナ

官府公表による一九三九年九月三〇日現在のパレスチナの人口は（英國軍隊及遊牧民を除き）一、四七六、九〇〇人、一九三一年の人口調査時に對比して一倍半近く（四二・六%）の著增で、一九二二年以降に倍化してゐることになる。この異常な人口增加は主として年と共に增加するユダヤ人の移入に依るもので最近十年間に特に著しい。ユダヤ人の數は一九二二年以降に五倍となり、その總人口に對する割合は十分の一强から十分の三近くに高まるに到つた。

總人口の二分の一近くは都市に住んでゐるがユダヤ人は特に都市住民が多い。エルサレムの人口は一二九、八〇〇人、純ユダヤ人都市の觀あるテル・アヴイヴは一三〇、三〇〇人で同地方最大の都市となつてゐる。

人口密度は一方粁當り五六人だが、四大都市（前掲の外ハイフア及ヤツフア）を除くと約四〇人に過ぎなくなる。

尙遊牧民の數は六六、五〇〇人と報告されてゐる。

（Wirtsch. u. St. 1940 Nr. 7/8 所載）

正常健全な年齡構成を示す和蘭

一九四〇年一月一日現在の和蘭の公簿人口は約八、八二九、五〇〇人、一方粁當り二五二人でベルギーに亞ぐ歐洲第二の人口稠密國である。

主都ハーグの人口は五〇四、二〇〇人だが、人口は國際港市アムステルダムの八〇〇、七〇〇人、ロッテルダムの六一九、七〇〇人の方が上位にある。

和蘭は歐洲諸國中正常且つ健全な年齡構成を有つ例外國の一つで、近年の出產頻度の低下にも拘らずベルギー、フランス、イギリス等と較べると青年人口の底邊は猶ほ極めて廣い。表示すれば次の如くである。

	一九三八、一、一公簿調査		一九三〇、一二、三一人口調査	
	千人		千人	
一五歲以下	二、四七三	二八・六%	二、四三三	三〇・七%
一五—三〇歲	二、二四三	二六・〇	二、一〇五	二六・五
三〇—四五歲	一、七九二	二〇・八	一、五四九	一九・五
四五—六五歲	一、五四三	一七・九	一、三五八	一七・一
六五歲以上	五八一	六・七	四九二	六・二
計	八、六三二	一〇〇	七、九三六	一〇〇

（Wirtsch. u. St. 1940 Nr. 10 所載）

年齢構成の惡化するベルギー

一九四〇年一月一日現在のベルギーの登錄人口は八、三九六、〇〇〇人、內男四、一四五、〇〇〇人、女四、二五一、〇〇〇人、女子過剩は男一、〇〇〇に對し一、〇二六の割合となる。（一九三〇年は一、〇一九、一九三九年は一、〇二五）。

一方粁當り二五二人の人口密度は歐洲諸國中第一だが、特にアントワープ、ブラバン、西フランデル三州の人口密度は一方粁當り四〇〇人を超え此の地方は歐洲のみならず全世界で最も人口稠密なる區域に屬する。

ベルギーでは最近百年間の都市膨脹にも拘らず行政上の統一が行はれてゐないので主都ブラッセルの人口は正式には一八九、〇〇〇人に過ぎないが、その近郊を加へると九〇七、〇〇〇人となる。同樣に國際港市アントワープは二七一、四〇〇人、近郊を加へると四九〇、七〇人となる。

ベルギーの年齢構成は次表の如くで出產制限の結果として一九一〇年以降に根本的な變化の跡の現はれてゐるのが窺はれる。一九一〇年には總人口の主體（五六・四%）は三〇歲以下であつたのが、一九三九年には三〇歲以下の人口は總人口の五分の二を僅かに超えるに過ぎない（四三・九%）。人口の主體は三〇歲以上の人口（五六・一%）に移つて了つたわけで、六五歲以上人口の割合（九・三%）は特に高い。世界諸國中フランス、エストニア、ラトビアが之に比肩する數値を示すのみである。

（Wirtsch. u. St. 1940 Nr.10 所載）

	一九三九年首の登錄人口	一九三〇年末の人口調査	一九一〇年末の人口調査
一五歲以下	一、八四一千人 二二・二%	二三・〇%	三〇・五%
一五—三〇歲	一、七九八 二一・七	二五・六	二五・九
三〇—四五歲	二、〇〇一 二四・〇	二二・二	二〇・二
四五—六五歲	一、八九六 二二・八	二一・六	一七・〇
六五歲以上	七六九 九・三	七・六千人 六・四	
計	八、三〇五	（總人口）八、〇九二	（總人口）七、四二四千人

ハルド教授の加奈陀將來人口推定

加奈陀マクマスター大學のW・B・ハルド教授が一九三一—三六年の出產率及び一九三一年の生命表に依る死亡率を基準として算出せるところに依ると、一九七一年に於ける加奈陀の人口は一千五百四十萬となるといふ。（因みに一九三一年六月一日の國勢調査では一〇、三七六、七八六であり、一九三八年五月推定のカナダ人口は一千百二十萬であつた）。

此の豫測人口に依り推定すれば、一九二一—三一年のカナダの自然增加率一八・二%は一九六一—七一年には八%に低下することになる。年齢構成も著しき變化を示し、二十歲より三十五歲の青壯年層は一九三一—四一年に五十萬を增加し、一九四一—四六年には十八萬を增加するが、一九四六年以後は漸次減少することになる。この期間中に於ける結婚適齡者の增加は建築及び家具製產業の發展に好影響を及ぼすであらう。一九四一年には一九三一年に比し五歲乃至十四歲の兒童が十六萬八千減少する。但し一九四一—五一年には右年齡級兒童は二十八萬七千（一四%）增加する。斯くてこの十年間に初等校の學童數は增加し、教科書の需要が旺盛となる。これに反し、十五歲乃至二十四歲の青年層は一九三一—四一年には二十萬八千增加するが、一九四一—五一年には十六萬二千に減少する。これは一九四一—五一年間に社會に出る學校卒業生の絕對數の減少を意味し、失業問題は緩和されるものと考へられる。而してこの十年間には實業界幹部級の平均年齡が著しく低下して注目されるであらう。思想的には次の十年間は青年層の未熟な選擧人の減少により、急進主義的傾向の後退を見ることになるであらう。一九七一年に於ける七十歲以上の老齡者數は一九三一年の二・七倍となる。尤も老年層扶養の義務は幼年者の減少により、緩和されることになるであらうといふ。

斯くてカナダの人口も西歐其他の文明諸國家のそれに等しく、漸減の傾向を示して居り、年齡構成の變化に伴ふ社會的諸問題に對する調節の必需性が濃厚となりつゝあることが窺へる。（The American Journal of Sociology, Sept. 1940 所載）